執心なかれとなり

「日曜寸言」０４０９１９

「そもそも、一期の月影かたぶきて、余算の山の端に近し。たちまちに、三途の闇に向はんとす。（中略）仏の教へ給ふおもむきは、事にふれて執心なかれとなり。今、草庵を愛するも、閑寂に著するも、さはりなるべし。」鴨長明『方丈記』巻末の一文である。

文意は、「そろそろ私の生涯も終わりに近づいて、時間の残りは少なく、間もなくあの世へ行く。（中略）仏様のお教えに従えば、何事にも執着するなという。この方丈の草庵への愛着も、閑さに執着するのも往生の障害になるという」というのである。

人生を６０余年もやってくると、まあよくも集めたものだとあきれるほどにガラクタが身辺を囲い込んでいる。先ず、書物。数えたことも無いので何冊あるかは分からない。ただ大変な数だ。筆者は、中学生時分から、一年間に自分の身長と同じ厚さだけ本を読むことを義務づけてきたので、専門とは関らない書物が積んだ高さで６、７０メートルはあるだろう。加えて、専門書にいたってはバカにならない。これらの書物を生きて再読する時間は最早無い。

初めて月給を貰って、最初に買ったＬＰレコードは、カラヤン指揮のベートーベンの短調交響曲一枚だったが、これが５００枚を超した時分にＣＤが出現。それに乗り換えてから、数えてみればこれも６００枚を優に超えている。これら全曲を聴くとなればざっと千余時間が必要で、これも死ぬまでに全部再生する時間はもう無さそうだ。

身辺のガラクタはこれにとどまらない、苦労の末に愁眉を開いたときの実験データ。初めて高等数学の関数値を８桁の精度で計算に成功したときの国産１号電子計算機のプログラムなどなど、まさに「執心」の重力中心のようなファイル類がトン単位で存在する。「執心」を払い除けてどのように始末するか、今最も切実な問題である。

この４０年の戦友・我が家人も同一の問題に逢着している。三人の子供の産着などというちり紙交換ものからしい。その息子達が受験生時代に闘志を掻き立てるべく頭に巻いた「必勝」の鉢巻等々。加えて、貧しい家計をやりくりしてデパートから買ってきた当時流行のコスチューム。これらがありとある押入れや納戸を占有している。彼女もまた、己の「執心」に悩んでいるらしい。ただ、筆者と違うところは、本屋から『私の整理術』というようなハウツー本を大量に買ってきては、それらを積んで安心立命しているところだ。

『方丈記』の末尾には、「そのとき、心、更に答ふる事なし。只、かたはらに舌根をやとひて、不請阿弥陀仏両三遍申てやみぬ。」とある。